

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山根純佳

山根純佳の博士論文、「なぜ女性はケア労働者になるのか」は、フェミニズム理論のふたつの系譜である構造決定論と主体選択論とを、ポスト構造主義フェミニズムの鍵概念である「エイジェンシー」概念を用いることで同時に乗り越えようとする理論的な調停の試みである。エイジェンシーとは、与件としてのジェンダー規則のもとにある言説資源やその他の物質的資源配分構造の制約のもとにありながらも、解釈実践と交渉実践によってそれを変更する潜在的可能性を持った行為主体性を指す。それを通じて、社会学の古典的な問いともいえる「構造か実践(主体)か」という問いに対しても一定の答えを与えることで、構造の再生産のみならず変動の可能性についても説明可能な理論的な枠組みを与えることで、今日の社会学理論へも貢献を果たした。

論文の構成は以下の通りである。まず序章で、性別分業が公的領域においても私的領域においても再生産されている状況を、「なぜ女性はケア労働者になるのか」と問いを立て、構造決定論と主体選択論のふたつの理論を検討し、エイジェンシーという鍵概念について説明を述べる。つづく1章では同じ対立を社会学の「構造」と「実践」概念で検討し、いずれもが再生産論に陥り、変動を説明できないことを批判する。2章では資源配分構造による構造決定論を批判し、3章では言説実践による再生産論に対して、「解釈実践」という概念を持ち込むことで、エイジェンシーの行使による変動の可能性を示す。さらに4章と5章では、以上の理論的な分析装置を用いて、家庭という私的領域における性別分業の再生産と、ケアワークという公的領域における性別分業の再生産について、エイジェンシーを通じての「交渉実践」の効果を、経験的なデータにもとづいて示す。とりわけ5章では、介護保険の導入後成立した介護労働力市場においても「ケアは女の仕事」という性別分業が再生産されているメカニズムを、女性を中心としたワーカーズ・コレクティブの交渉実践と、逸脱的な存在である男性ホームヘルパーの交渉実践というふたつの事例をもとに検証する。その過程で、性別分業の再生産のみならず、変動の潜在可能性が示される。最終章では結論として私的領域と公的領域との性別分業の再編成をつうじたジェンダー体制の再生産と、そのもとの資源配分のジェンダー格差を指摘し、それがさらに女性間の多様性や格差を生み出すことを指摘して、将来の検討課題を示す。理論編に比べて実証編はいささか見劣りがするが、論文の主張は説得的であり、日本におけるジェンダー研究の第2世代の到達点を示す論文として、これ以降の研究者にとって里程碑となる性格を持つ。以上の評価にもとづき、審査委員会は本論文を博士(社会学)の学位に相当するものと認める。